



大学の「国民性」?

法学部 川崎 修

(現代政治理論)

立教大学で教えるようになるまでに、私は、学生時代も含めると二つの大学を経験している。ところで、大学を移ると決まるとよく聞かれる質問は、前の大学と今の大学とでは学生の気質や「文化」は違うかということである。また、自分の学生時代と今の学生とでは違うかといった世代の相違もよく聞かれる。しかし、この一見ありふれた質問は、実のところなかなかの難問である。

たしかに、立教を含む三つの大学の学生たちには、漠然とした「国民性」の違いがあるような気もするし、少なくとも世間ではそういうことになっている。ところが、多少なりとも人柄の一端に触れる程度のつきあいをした学生たちのことを具体的に思い浮かべると、こうした大学の「国民性」などというものはあまり意味をなさないことに気がつかされる。同じ大学の同じ世代の学生であっても、彼／彼女らは、それぞれ誰にも似ていない「顔」をもった若者なのだ。つまり、教師が学生たちに「学生」という匿名の集団として向かいあう時には大学の「国民性」なるものが存在するかに思えるのに、個人と個人としてつき合う間柄においてはそれが消えてしまうのだ。

さて、それでは一体どちらが「本当」なのだろうか。これは大げさに言えば政治学や社会学、哲学や倫理学の大問題に関係していて簡単には答えられない難問だ。だが、少なくとも、学生の皆さん自身にとっても教師にとってもどちらが大事なかは自明である。言うまでもなく、それは茫漠たる「国民性」ではなく、学生一人一人の個性である。

血液型や星座占いの話が、ちょっとした会話のきっかけを作ってくれるように、大学の「国民性」をめぐる話や世代によるギャップ話も、他愛ない雑談としては楽しいし、盛り上がりもする。しかし、これを真に受けて、教師も学生たち自身も、個々人それぞれがもっている可能性を見逃してしまうようでは、占いマニアを笑えないだろう。

